

～瀬戸内の島嶼部の医療を考えませんか？～

国内交流会 in 香川

代表者 樋渡 健悟 (医学部医学科3年)

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、香川県の中でも、特に高齢化が進み、医師不足も深刻である島嶼部の地域医療・公衆衛生について、現状を知ってもらう、また問題意識を持つことを目的として行われました。また、高齢化・医師不足という日本全体の医療が抱える問題を共有することを目的として、日本各地から医学生の参加を募り合同の勉強会・交流会を開催しました。

2. 実施期間（実施日）

平成25年5月8日 から 平成26年3月31日 まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業では、香川内での活動として、地域医療・保健行政等に関する勉強会を行いました。また、香川のみならず、日本が将来直面する超高齢化社会と医師の偏在について、平成25年6月15～16日、小豆島において合同の勉強会・交流会を開催しました。東京を含む全国から、合計31名の医学生の参加が得られました。この勉強会・交流会においては、全国の医学生と問題点を共有することができました。

このプロジェクト事業により、普段の講義では聞く機会の少ない、医療制度、医師研修制度やそれらの問題点と解決策等を学ぶことができました。勉強会・交流会では、初日に小豆島の医療拠点となっている土庄中央病院・内海病院の両院長をはじめ、自治医科大学を卒業し岡山で地域医療にあたられている医師、また香川県においてプライマリ・ケア、家庭医の推進を行っている医師、さらに香川県庁健康福祉課より講師を招聘し、香川県の



現状とその日本全体の医療との関係性などについての講義を行っていただくことが出来ました。また、小豆島の特産である醤油の製造・販売を行いつつ、教育の観点から地域の活性化を実践されている方をお呼びすることもでき、小豆島の宣伝だけでなく、学際的な学びの場も提供できました。



一日目の講義を受けて、二日目は

1. **自分が島もしくは他の医療過疎地に赴任するなら何歳ぐらいで赴任し、どんな仕事・生活をしたいか**
2. **国公立大学医学部卒の医師に5年（分割可）の医療過疎地赴任を義務化することに対して賛成/反対か**

（賛成ならその理由を、反対なら医療過疎を解決するための対案を発表）

というテーマのもとディスカッションを行いました。このディスカッションを通じて得られた結論として、「日本の医学生は、へき地での勤務が嫌というわけではない」「ただし、へき地に勤務するための条件として、医師としての教育システムが行き届いていること、また、一人に負担がかかりすぎないこと」を求めていることが分かりました。班ごとの意見として、自治医科大学のように地域医療を専門とする医学部の充実や、そのための奨学金制度の充実、もしくは現行の医学部入試の地域枠の厳格な運用という意見が出ました。また、ディスカッションテーマに基づき、医療過疎地研修を現在の初期研修医制度と後期研修医制度の間に組み込み、その中で地域医療・プライマリ・ケアという分野に関心を持ってもらうプログラムの創設、という意見も出ました。どの意見も、講師となってくださった医師からは好意的な見解を頂きましたが、特にこの研修医制度に関しては、家庭医の見地から非常に実践してみたいという意見を頂きました。また、参加者の意見を以下に抜粋します。



どの先生のお話も非常に印象的であったが、三宅先生の長年地域医療・離島医療に従事してこられたからこそその思いや考えには、深く考えさせられるものがあった。

（佐賀大学医学部医学科2年）

学生を観光半分、寺子屋半分で島に派遣する制度は面白かった。とにかく学生に島に来てもらい、島の魅力を伝えるための手段としては有効なのではないかと思った。

（岡山大学医学部医学科1年）

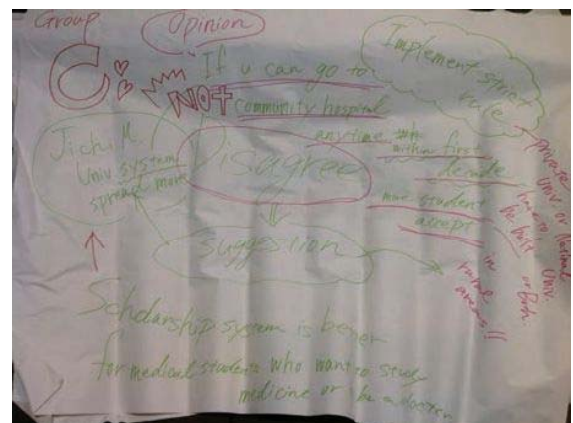
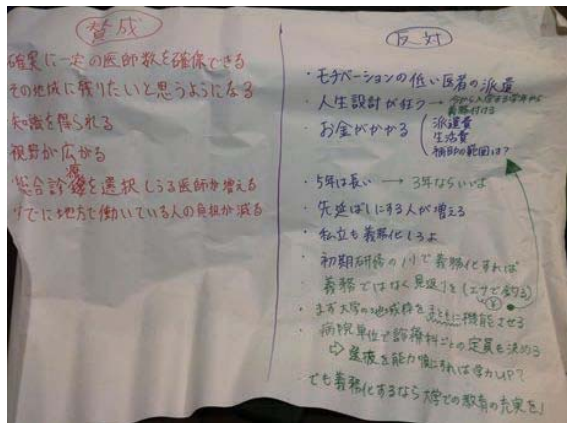
色々な先生のお話を聞いた後に、離島医療についてのGroup Discussionを行ったので、

色々な事を考えながら議論する事ができ、非常に有意義なものになった。

(佐賀大学医学部医学科 2年)

地域ブランドという点で全国的に有名になった香川県で、地域の将来のあるべき姿やその医療を考える良いきっかけとなった。その中で、全国から様々なバックグラウンドを持つ人が集まったことは非常に刺激的だった。

(東京医科歯科大学医学部医学科 5年)



各班の Group Discussion の発表に用いた資料

また、勉強会・交流会で得られた成果を、平成26年1月29日、本学医学部医学科一年生向けの講義時間の一部を使わせていただき、プライマリ・ケアという観点で本学医学部医学科一年生全員に共有することができました。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、本学医学部の低学年生に、地域医療の現場を早期に感じる機会を提供できました。彼らの意見として、地域医療そのものの大切さは分かっていたものの、その維持のために払われている医師たちの努力を感じることが出来たようです。また、今回の事業により形成された人脈により、他大学にて地域医療の促進をされている医師との繋がりが新たに生まれ、今後勉強会を開催するための素地が作られました。共通の問題意識を持つ医学生同士の間で交流ができたという点も、

その後平成25年11月の日本WHO協会への訪問や、平成26年1月に韓国にて開催された、学生による、慢性疾患をテーマとした国際会議への参加に繋がるなどという成果を生みました。

また、現場で働く医師のみならず、県の行政に対しても、小豆島の地域医療を担う医師との対話の機会を創り出すことが出来たほか、医学生として地域医療について日ごろより抱いている疑問点や、医学生なりの解決案を出すことができました。

さらに、日本プライマリ・ケア連合学会における発表の機会を打診され、それに向けて準備をしておりますが、本学会において発表をする機会を持つことが出来れば、日本全国の医学生のみならず、医師たちに今回の成果を伝えることができ、香川県の取組み、また、医学生の視点から見た研修制度・へき地医療に関する見解を広く伝えることが出来ると考えています。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今回、自らの学びを他人に伝えることを目的として継続的に勉強会を開催し、また一つの大きなイベントを計画したことで、一般的なカリキュラムに含まれる内容を越えた、自主的な学びの場を作ることができたという点で、今後とも継続した学びの場を作るという足掛かりとなりました。

また、医学部一年生だけでなく三年生に対しても、講義の時間等を通じて、小豆島の医療の現状等を共有することができ、勉強会に参加したことが無い人たちが関心を持つ一助になりました。また、香川でこのように全国から医学生が集まる機会を持てたことで、香川が持つ魅力を再認識する学生も周りにおり、その点でも大変有意義でした。



参加者全体の集合写真



普段の勉強会の様子

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今回のプロジェクトにおいて、一番の問題点となったことは、メンバー間の意思疎通が上手く図れなかったことにあると思います。医学部において、課外活動のメインとなるものはやはり部活動であり、その合間を見つけて活動する時間が取りづらかったことで、結果的にリーダー、サブリーダーが必要以上の仕事を抱えることになり、それが全体の能率の低下に繋がりました。今後とも活動を続けていく所存ではありますが、この点に関しては、メンバー間のスケジュール管理、参加率等も含めて改善点が多くあると思います。

今後は、学会での発表も視野に入れつつ、今回のプロジェクトを通して得られた人脈、知識を活かして、日本国内外の各地域の特性とそれに対する保健体制を知り、共有をすること、また、今回計画として立てていたものの、テーマのすり合わせの不備等で実現出来なかった、他学部との連携についても進めて行きたいと思っています。

また、先の5. で述べた継続的な学びの場については、今回の交流会に参加した本学一年生を中心として、「年一回の報告会を開催し、それに向けた定期的な勉強会」が開催されるなど、ボトムアップ的な活動が始まっており、今後の勉強会等のクオリティの向上を期待しております。

7. 実施メンバー

代表者	樋渡 健悟	(医学部3年)
構成員	漆原 愛子	(医学部3年)
	森並 次朗	(医学部3年)
	真境名 夏乃	(医学部3年)
	渡部 太輔	(医学部5年)